

# 2024 年度日本語教育学会秋季大会

## 大会若手優秀発表賞（口頭発表） 受賞コメント

小幡佳菜絵（清華大学大学院生）

この度は、大会若手優秀発表賞を授与していただき、誠にありがとうございます。このような名誉ある賞を頂戴し、大変光栄に存じます。この場をお借りして、研究に協力してくださった皆さまをはじめ、研究をより磨くため、厳しくも日々励ましのお言葉をくださっている指導教官や日本の先生がた、そして、切磋琢磨するなかで日々刺激をくださっている同志の皆さまに、厚く御礼申し上げます。また、発表当日に、洞察あふれる質問をしてくださった皆さまに、改めまして御礼申し上げます。

本研究は、年少者海外継承日本語教育について、家庭という教室外の文脈を明らかにすることを目的としています。当該領域の先行研究のなかでも、とりわけ、Okita (2002) が先駆的に提起した「Invisible Work」という概念から主たるインスピレーションを受け、在北京日中国際結婚家庭における、日本にルーツを持つ母親の皆さまのライフストーリーを基盤に、本研究課題に対する探索を試みました。「Invisible Work」とは、本研究で対象とした在北京日中国際結婚家庭のような、複言語・複文化を内在的特徴とする家庭の母親たちが、パートナーの出身国・地域に居住するなど、概してマイノリティの立場で子どもの継承語教育に従事するうえで、その努力や葛藤が、社会的に不可視化されやすい（十分に認識されにくい）傾向を指す概念である、と理解できます。本発表では、このような「Invisible Work」において、母親たちが経験しうる「葛藤」を惹起する社会的要因に、とりわけ着目しました。

本研究で対象とした5名の母親の皆さまの語りからは、「Invisible Work」における葛藤要因・内実として、例えば、次の点が見出されました。まず、子どもたちの学校選択に際して、概して、日本または中国に紐づく学校選択を二元論的に迫られる、という経験です。この経験は、子どもたちが生きるトランスナショナルな生の様相と、必ずしも一致するものではありません。また、中国の現地校を選択したご家庭では、子どもの日常生活上のニーズから鑑みて、中国社会への統合上、日本語学習は、必ずしも切迫した必要性に迫られないものとして、経験されることが見出されました。この経験は、継承日本語教育に従事することが、ともすると「親のエゴ」なのではないか、という懐疑をも生じさせる要因となりうることが示唆されました。

このような、ともすると不可視化されやすい（マイノリティの立場におかれた）母親たちの声や経験・文脈を、少しでも「Visible」にすることは、年少者海外継承日本語教育に関する研究・実践をさらに進めていくうえで、大切な視座のひとつであると、私は理解しています。自分自身も移民として日々国外で生活するなかで、自身が従事する研究や実践が、マイノリティの立場で生活を営むかたたちのエンパワーメントに、どのようなかたちで繋がりを築きうるのか、本発表準備に取り組むうえでも、そして今現在も、考え続けています。この度の受賞、そして、何より発表に際していただいた洞察を糧に、この問いに真摯に答えられるような研究・実践に向けて、これからの日々も、引き続き精進したいと存じます。改めまして、この度は、授与していただき、誠にありがとうございます。



# 2024 年度日本語教育学会秋季大会

## 大会若手優秀発表賞（ポスター発表） 受賞コメント

氏名 山西 智香（早稲田大学大学院生）

この度は、大会若手優秀発表賞を授与していただき、誠にありがとうございます。このような名誉ある賞をいただき、驚愕しておりますが、同時に大変光栄に存じます。

本研究には2つの論点があります。1つ目は、日本語非専門家である日本人看護師が日本語教育の観点を持って指導していく必要性についてです。2つ目は、今後マンパワーとなり得るプラチナナース（定年退職前後の看護師）を、医療分野における日本語教育者として養成する可能性についてです。私自身、看護師として外国人医療者への教授経験がありますが、日本語教育の観点や知識の必要性を感じていました。そのことが本研究の問題意識に繋がっています。



本研究は、外国人医療者（研修生・留学生）に専門分野を教えるプラチナナース6人に焦点をあてました。①外国人医療者を教える際の困難な時期と困難の内容はなにか、②日本語教育の観点からどのような支援が必要なのか、③プラチナナースを医療分野における専門日本語教育者として養成する意義は何か、について半構造化インタビューをしました。困難の内実を把握するために、困難な時期を3期（受け入れ準備期・受け入れ後・専門分野教授時期）に分類し、SCAT分析を用いて分析しました。プラチナナースが抱える困難な時期と内容を明らかにすることで、日本語教師が適切な時期に現場へ介入していける可能性や、ニーズに合わせた支援の提供が出来ると考えました。同時に、プラチナナースは、現場で協働する際や専門分野教育の指導の際には、相手に伝わる表現力や日本語調整力の向上、教授方法など、日本語教育の観点が必要であることが明らかになりました。

増加する外国人就労者への分野に応じた日本語教育の必要性が急がれている中、先行研究や自身の経験からも日本人看護師は日本語教育の知識や観点を踏まえた指導が出来ていない現状があります。現場の日本人看護師と日本語教師がそれぞれの得意分野を活かして継続的な連携と関係構築をしていくことは重要だと考えています。

本研究では、現職の看護師ではなく、定年退職前後の看護師の「プラチナナース」に着目しました。しかし、「プラチナナース」といった言葉の認知度が低く、発表時に分かりやすく説明できるか不安でした。しかし、当日に質問をして下さった皆様のお陰で多くの気づきと学びを得ることができました。心より感謝申し上げます。また、研究指導をして下さった先生方、研究対象者の方々、支えてくれた友人たちにも深く感謝申し上げます。研究者としてはまだまだ未熟ではありますが、この受賞を励みに自身のキャリアである医療分野と日本語教育学分野の懸け橋となる人材になりたいと思っています。今後とも、ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願いいたします。

\*任意で、動画による受賞コメントもお寄せいただきました。[こちら](#)から視聴が可能です。

[2024 年度日本語教育学会秋季大会（姫路市市民会館，2024. 11. 17）口頭②]

### 海外継承日本語教育における“Invisible Work”

—日中国際結婚家庭日本人母親の「葛藤」要因に関する社会言語学的一考察—

小幡佳菜絵

本研究は、日中国際結婚家庭の日本人母親のライフストーリーの視角から、年少者海外継承日本語教育における、日本人母親の営為・心理的「葛藤」のありようを明らかにすることを目的とする。日本国外に居住していることから、概して、文化的・言語的マイノリティの立場に置かれる日本人母親たちにとって、継承日本語教育という営為は多様な葛藤を伴うにもかかわらず、それらは社会的に十分に認知されにくく、不可視化されやすいことが指摘されている（Invisible Work）。本研究では、ライフストーリー研究法によって、次の 3 種類を葛藤要因として呈示したい。(1) 実際の生のありようと異なり、国籍・学校・子どもの第一言語の選択は離散的に経験されうること；(2) 子どもの生活上のニーズに反して日本語を学習させることは、「親のエゴ」として経験されうること；(3) 言語選択・学校選択の不可逆性を経験する一方、絶対的な「正解がない」感覚にとらわれうること。

(小幡—清華大学大学院生)

[2024 年度日本語教育学会秋季大会（姫路市市民会館，2024. 11. 17）ポスター⑤]

### 日本人看護師への日本語教育養成についての検討

—ブラチナナースの活用を踏まえて—

山西智香

少子高齢社会の中、人材不足が叫ばれ多様な枠組みで入国する外国人医療従事者が増加している。一方で、専門分野を教える人材の不足や、多様な日本語能力に対してどの様に教授すればよいか分からないといった問題点がある。外国人の日本語理解を促すためには、日本語教育の視点を取り入れた専門分野の教授が必要だと考えた。しかし、専門分野の人材は外国人に対して専門分野を日本語でわかりやすく教える方法を学んだ経験がほとんどない。そこで、本研究は、多様な場所で外国人医療者に教授している看護師を対象に、専門分野を教える際にどのような困難があり、どのような日本語教育支援が必要なのか、医療分野における教育者をブラチナナース（定年退職前後の看護師）が担っていく意義について明らかにした。

(山西—早稲田大学大学院)